

雲のたなびきたるいとあはれなり、

〔萬寶鄙事記占天氣〕日 雨と晴とをまるとは、先曉の天氣と日の出る時をうかぶべし、日の出るとき赤きは風、黒きは雨、青白きは風雨とまるとし、又日の出るときはれてやがて陰りて晴ざるとは風雨となる、連日の陰雨の後、日出て早く晴るはかへつて雨ふる、朝曇りてやうくをそく晴るは晴さて又明日の日和は、今晚の日の没とき見るべし、日没に照ば晴る、雲の中に日入ば、夜半の後にあめ、あるひは明日かならず雨ふる、日入て後、やうやく紅粉のごとくにして、やがて色かはるは風もしくは雨ふる、日の入るとき雲あかけれ共、其色かはらず、漸うすくなりてきゆるはよし、黒雲日の入につゞくは明日天氣よからず、西に黒雲あれども、日のいる時雲なく日のかたち見えて、日雲外に入れば雲はれて明日も晴る、日のいる黄なるは風略 赤き雲氣日の上下に有時は大風いさごをあぐ、但し色變せずして、やうやくすくなるときは、晴て又風もふかず、白氣日月の上下にひろくしくは、三日の内に惡風雨有、

日蝕

〔倭名類聚抄景宿〕蝕 釋名云、日月虧曰蝕、音食、稍小浸虧、如虫食草木葉、故字從虫食也。

〔箋注倭名類聚抄景宿〕按、日本紀、蝕訓八江、當是古訓、蓋源君之時、人皆音讀、不以國訓呼、故此不載訓、羅古訓、字須毛乃、或訓字須波多、檀、古訓多利、本書並不載訓、皆此例也。略 原書、今本蝕作食、玄應一切經音義再引、及廣韻引、並作蝕、與此合、按、說文、蝕、敗創也、又云、食、一米也、二字不同、此作蝕、正

字、作食、假借也、原書、今本稍小作稍稍、廣韻引作稍小、與此合、下總本、浸作侵、與原書合、按、說文、有侵無浸、史記孝武本紀、文選上林賦、風賦、浸淫字、皆作侵淫、知浸即俗侵字、連下字、變人從水也、古書或借澆爲侵淫之侵、因謂浸淫之浸、即說文澆字之省、非是、原書無故字從虫食、五字、按、說文、蝕、从虫人食、然則作蝕、隸省耳、此云字從虫食者、非古義、是五字恐非、劉熙原文、